

## 論文

## 文化的差異の経験の認知 ——異文化感受性発達モデルに基づく日本的観点からの記述——

Perception of Experiencing Cultural Difference: A Description from  
the Japanese Perspective based on the Developmental Model of Intercultural  
Sensitivity

山本 志都 Shizu Yamamoto<sup>1,2</sup>

## 要旨

本研究は、文化間の差異性の認知、および、その位置付けや評価に関わる異文化感受性が、日本でどのような世界観により経験され体現化されているか明らかにすることを目的とする。そのために、Milton Bennettの異文化感受性発達モデル (A Developmental Model of Intercultural Sensitivity) を基にして、日本における異文化感受性を検討する。DMISには、文化の次元や種別に関わらず、同じ異文化感受性が適用されると見なす前提があるが、対象となる文化の категорияが異なっても、認知の構造は実際に同じであるか、日本の文脈から異文化感受性を明らかにする研究の流れの中で、この点についても検証する。調査では「国」、「地域」、「専門・組織」と複数の文化の categoriaを用いたが、本論文は一連の研究分析の最初の報告として「国」に焦点をあてる。予備調査として質的研究を行い、その結果を本調査で用いる質問紙の項目として使用して、5県に住む20歳以上の男女1000名を対象にインターネット調査を行った。探索的因子分析の結果、F1「違いの克服」(F1-1「曖昧化」、F1-2「積極性」)、F2「違いへの不関与」(F2-1「拒絶」、F2-2「逃避」)、F3「違いの容認」(F3-1「譲歩」、F3-2「尊重」)、F4「違いの内面化」、F5「違いの無効化」、F6「無所属感」、F7「違いへの憧れ」の因子を抽出した。サブカテゴリーまでを含めた因子間の関係を見るために確認的因子分析を行った。因子間の相関係数および概念的意味より、自文化中心的あるいは文化相対的な世界観を示す因子が特定された。また、その双方の世界観をつなぐ中継的役割と解釈できる因子のあることが明らかになった。これらの結果に基づき、抽出された因子とDMISとの関連性および日本での異文化感受性の表れ方の特徴が検討された。

**キーワード**：異文化間能力、異文化感受性発達モデル、異文化適応

## Abstract

This study explores how intercultural sensitivity is embodied in terms of people's perception and evaluation of cultural differences in Japan, through the use of Milton Bennett's Developmental Model of Intercultural Sensitivity (DMIS). DMIS assumes that a person applies his "peak" experience of intercultural sensitivity to any level or category of culture. This paper particularly focuses on the recognition of national cultural difference out of the three levels of culture (nation, region, profession/organization) that were originally prepared for the study. The questionnaire was constructed and based on qualitative interviews. 1000 subjects residing in Japan answered the internet survey. As a result of factor analysis, 7 factors including 6 subscales were extracted: F1=Overcoming Difference (F1-1=Blurring, F1-2=Positive Attitude); F2=Non-engagement with Difference (F2-1=Refusal, F2-2=Escape); F3=Allowance of Difference (F3-1=Compromise, F3-2=Respect); F4=Internalization of Difference; F5=Cancellation of Difference; F6=Sense of Not-belonging; and F7=Admiration for Difference. Connections between factors and DMIS were found, while some distinct characteristics that illustrated the embodiment of intercultural sensitivity in Japan were also recognized.

**Keywords** : intercultural competence, Developmental Model of Intercultural Sensitivity, intercultural adaptation

1 〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4-1-1 東海大学文学部英語文化コミュニケーション学科  
shizuyamamoto.tokai@gmail.com

2 本研究のインタビュー調査において、平成24年度青森公立大学コミュニケーション演習IIの秋田谷聡子氏、岩本和也氏、岩本剛彦氏、竹内希氏、名垣若菜氏、三上夏奈氏の協力を得ると共に、インタビュー参加者のご協力を得ました。本研究は、平成24年度「財団法人青森学術文化振興財団」による研究助成を受けて行われた研究成果の一部です。ここに記して感謝を申し上げます。

## 1. 問題

教育やビジネス、医療の現場など、異なる文化的背景を持つ他者と、協同で課題の達成に取り組む場面は多い。そのような場面で体験したことを、概念的に、もしくは気持ちの上で整理し、理解を深め、さらには効果的な協働のための態度や行動を模索することに役立つ、理論やモデルの開発が必要とされてきた。

このような背景の下、1986年 Bennett が提示した「異文化感受性発達モデル」(A Developmental Model of Intercultural Sensitivity=DMIS; Bennett, 1986, 1993, 2011, 2013) は、後に、モデルの各段階を尺度化した心理テスト (Intercultural Development Inventory=IDI; Hammer, 1999; Hammer, Bennett & Wiseman, 2003) の開発へと発展した。DMIS は、多くの研究者らによって引用され、議論されており、開発者の Bennett を「異文化間能力の主要な構成要素を特定するモデル開発の第一人者」(Matsumoto, 2000, p.378 筆者試訳) とする評価もある。

一方で、異文化感受性によるアプローチの価値を認めつつも、日本人の異文化体験を具体的に理解するには、DMIS 上の描写のみでは不足とする意見もある。Yamamoto (1994) や山本 (1998) における質的研究では、モデルの各段階をカテゴリーとして、日本人大学生への面接調査で収集したデータを分析したところ、一部のカテゴリーがデータに対し全く当てはまらなかったと言う。その要因として、日本人の文化的違いに対する受け止め方が、DMIS で描写されるものとは異なる可能性のあることが考察されている。また、日本人大学生の IDI の回答を分析した山本・丹野 (2002) は、下位尺度の中に、内的整合性の低いものや一因子として観測されなかったものがあったことを踏まえ、「(DMIS の) それぞれの段階で何をどのように文化的違いとして捉え、どのような位置付けを行うかといった意味を日本文化の文脈から探り、それに基づく項目化が課題」(p.41) と述べている。

本研究は、文化間の差異性や類似性の認知、および、その位置付けや評価を、日本の文脈から読み解こうとするものである。異文化感受性を日本の文脈の中から検討し、DMIS と関連付けながら再構築したい。以下に、DMIS およびその関連研究を紹介し、本研究の目的を述べる。

### DMIS (異文化感受性発達モデル)

DMIS は、構成主義や認知的複雑性理論に依拠しており、より単純な知覚、および、その結果としての浅いレベルでの文化的違いの経験から、より複雑な知覚、および、その結果としてのより洗練された文化的違いの経験へと、発達することが仮定されている (Bennett, 2013)<sup>3</sup>。どこに異文化性が見出され文化的境界が知覚されるのか (もしくは知覚されないのか)、何をどの程度の文化的差異 (もしくは類似性) として認知し評価するのかが、主観的な違いの経験として、異文化感受性の発達で示されている。「自文化中心的 (ethnocentric)」な前半 3 つの段階と「文化相対的 (ethnorelative)」な後半 3 つの段階、および、それぞれの段階における下位概念から成る。各段階は違いの経験を表すとされているが、この場合の「経験」とは、Kelly (1963) の言う、我々は出来事が起こっているときにその傍らにいて経験を所有するのではなく、むしろ経験とはその出来事をいかに解釈するかの問題で

3 M. J. Bennett の初期の論文 (1986, 1993) では、モデルの理論的背景の記述が曖昧であったため、モデルの各段階が互いに静的に独立し、その内容も客観的特徴を示すものであるという誤解を生む恐れがあった。近著 (2011; 2013) では、構成主義や認知的複雑性などの理論的背景が明示されている。

ある、という文脈上での「主観的な経験」に該当する。したがって、各段階は、差異性に関わる様々な事象を解釈する世界観が段階的に変化する過程を示す。換言すると、文化的違いに関する個人の世界観の構造が、発達し、複雑化するにつれ、異文化の主観的な経験も変化していくという過程を示すが、モデルにおける6つの段階であると言える。さらにその世界観が、現実の相互作用においてはどのように体現され得るのか示すものとして、各段階における特徴的な態度や行動は、描写されている。Bennett (2013) は、性格、知識、態度、スキルのいずれかの組み合わせによって人びとの行動が「引き起こされる」という、実証主義的な仮定が、DMISには置かれていないことを主張している。下記の Figure 1 に DMIS (Bennett, 2011) を示す<sup>4</sup>。

6つの 段階	自文化中心的			文化相対的		
	違いの 否定 (Denial)	違いからの 防衛 (Defense)	違いの 最小化 (Minimization)	違いの 受容 (Acceptance)	違いへの 適応 (Adaptation)	違いとの 統合 (Minimization)
	無関心 (Disinterest)	侮蔑 (Denigration)	人間的類似性 (Human Similarity)	行動相対主義 (Behavioral Relativism)	認知上の 枠組み転換 (Cognitive Frame-Shifting)	建設的境界性 (Constructive Marginality)
サブ カテゴリー	回避 (Avoidance)	優越 (Superiority)  反転 (Reversal)	普遍的価値観 (Universal Values)	価値相対主義 (Value Relativism)	行動上の枠組み 転換 (Behavioral Code-Shifting)	倫理的 コミットメント (Ethical Commitment)

Figure 1 異文化感受性発達モデル (DMIS)

Bennett (2013) によると、自文化中心的段階では、自分自身の文化が「現実性の中心」として経験される。第一次的社会化による所与の信念や行動様式については「そのようなもの」として無条件に受け入れるが、それ以外の代替的な信念や行動を現実味のないものとして認識する。また、違いを避ける傾向がある。文化相対的段階では、現実を整理する方法に自分以外のやり方が数多く存在することが認識され、自分の信念や行動様式はその一つにすぎないものとして経験される。

以下の説明は、Bennett (2011, 2013) からの引用に基づき、一部に山本 (2011) の解釈が加わる。本研究の分析と考察に深く関わるため、できるだけ詳細に記す。

#### ①違いの「否定」(Denial of Difference)

「否定」という言葉は違いの否定的評価を連想させるが、ここでの「否定」は、違いが目の前にあっ

<sup>4</sup> Bennettの過去の論文(1986, 1993)以来、サブカテゴリーの名称は多少変遷してきた。Bennett (2013)の著書では、サブカテゴリーは3つ(反転、人間的類似性、普遍的価値観)のみしか言及されておらず、他のものについては各段階の描写としての記述に止まっている。ここでは、より具体的に各段階を示すために、Bennett (2011)に基づいたサブカテゴリーを表示する。なお、サブカテゴリーは筆者による試訳である。

でも見えていないような状態を指しており、違いの「存在を否定する」ものとして。文化をカテゴリーとして識別せず、データ(知覚情報)を異なる文化的コンテキストから知覚／解釈することができない。気づかない、もしくは、やや漠然とした理解をするため、違いは全く経験されないか、「外国人」や「移民」のように、未分化の他者の類として経験される。文化差を実感しないため自己の世界観が脅かされず、否定的な気持ちを持たないが故に、ステレオタイプに基づく愚問を悪意無く発したり、「人は人、自分は自分」のように表面的な寛容性を示したりする。Bennett (2013)によると、この段階の世界観で違いを経験している人びとは、文化的差異に注意が向くようなことがあっても、一般的に無関心であるが、自分たちに影響が及ぶとなると、違いを回避もしくは除外するために、攻撃的な行動に出る可能性があるという。

#### ② 違いからの「防衛」(Defense against Difference)

文化的差異のカテゴリーは複雑化するが、ステレオタイプの分類が持続され、データは、「我々 V.S. 彼ら」のように、自文化を善、他文化を悪とする二極化した評価カテゴリーで整理される。自文化の肯定的側面を過剰に評価して優位性を保ったり(「優越」)、他文化の自文化と違うところを否定的に批判したり(「侮蔑」)することで世界観を守る。他の文化を肯定的に見ることは、自文化への攻撃だと解釈することもある。「反転」では、元の文化よりも自分が適応した文化の方が優れているとし、自文化に対し否定的なステレオタイプを適用する。

#### ③ 違いの「最小化」(Minimization of Difference)

文化的差異を自分のよく知っている上位カテゴリーに取り込むことで安定性を保つ。自己の世界観が全ての人にとって現実性の中心であるもののように体験される。理解しにくいデータの場合は中立的に知覚して、自分の世界観で馴染みあるカテゴリーに分類する。「おじぎ、握手、キスなどは全て敬意を示す方法にすぎない」等、違いを自分に親しみあるものの一種のバリエーション的表現として体験する。「誰もが(自分と)同じ」という前提は、「普段通りの自分でいればよい」という態度を助長し、自文化の中のパターンへの気づきや、他文化への理解や、適応行動を妨げる。食文化の違いなど表面的な文化の違いを認めても、人間は皆食べる必要性がある等の生理学的な共通点を強調することや、人間の生物としての身体的共通項を強調することがある(「人間的類似性」)。また、宗教(「我々は皆神の子」)や社会哲学の価値観(資本主義・マルクス主義)による普遍性を唱えることもある(「普遍的価値観」)。

#### ④ 違いの「受容」(Acceptance of Difference)

文化的カテゴリーの差異化と精緻化により異なる文化を豊かに体験できるようになる。データは文化的文脈として整理され、文化一般的(culture-general)な枠組で、文化間の行動や価値観を体系的に比較したり、文化特定の(culture-specific)な枠組みで、行動や価値観を文化的文脈に沿って分析したりできるようになる。同意して受け入れるという意味ではなく、文化差を異なる世界観の産物として捉え、代替的で等しく価値あるものとして認める。「行動相対主義」では全ての行動は文化的文脈と切り離せないという認識を持ち、文化的文脈の間、もしくは、内側における複雑な相互行為を理解することに、探求的な姿勢を示す。「価値相対主義」では、信念、価値観、善悪の判断におけるパターン等を全て文化的文脈から切り離せないものと認識し、文化的世界観をこのような価値観との関連において理解することができる。

### ⑤違いへの「適応」(Adaptation to Difference)

文化的なカテゴリーの境界が柔軟になり、体験は意識的に特定の文化的文脈に関連づけられる。データを意識的にリフレーミングすることで、違った見方をすることができるようになり、そのため様々な文化的文脈上で自分の経験を構築することができるようになる。エンパシー (empathy) によって異なる世界観に感情移入し、見方をシフトすることができる。異なる見方ややり方を、自分の世界観の範囲内でそのまま模倣するのではなく、その文化差を生み出している、自分のものとは異なる世界観に感情移入して、そこから考え、行動するという意味での適応である。「認知上の枠組み転換」では、もう一つの文化の世界観へと意識的に見方をシフトすることができ、それによってその文化の経験を複製することができる。「行動上の枠組み転換」では、もう一つの文化の世界観を直感的感覚で把握して、文化的に適切な行動へとシフトすることができる。

### ⑥違いとの「統合」(Integration of Difference)

世界観のカテゴリーは、文化または個人に影響を与えると同時に、それらによって形成され保たれる構成概念として経験される。データは文脈の中に生じると同時に、データが文脈を生み出す、という関係性が認識される。個人が新たな文化で申し分なく適切に振る舞えるように、著しくそして持続した努力を続けた場合に、統合の状態が起こる。状況に応じ複数の世界観から対応することができ、そのように流動的なプロセス上にある自己のあり方自体にアイデンティティを見出す。「建設的境界性」において、世界観と個人の間の相互作用性に気づくと、特定のひとつの文化に根差すのではなく、その場の文化的文脈に応じて自己のアイデンティティを定義づけるあり方が見出される。既存の境界 (e.g., 国家) による同集団の結びとよりも、他の境界的同輩との間に共通点を感じる。Bennett (2011) によると、「倫理的コミットメント」とはPerry (1970) の言う「commitment in relativism」を体現できるような倫理体系を構築する状態である。これは、Perryによる学生の認識論的発達の研究から採用された概念で、文脈に応じた相対主義や他者の選択を尊重する姿勢を持ちながら、同時に、自分のコミットする立場や信条、価値観は、自分が選択するという考え方である。

Bennett (2013) は、これら6つの発達段階は連続体で、その全てが誰の中にもある程度共存するとしている。また、個々の段階を独立的に使用したラベリングによって異文化感受性レベルを評価するのではなく、個人の文化的差異の経験の中で中心的な役割を果たす段階を「predominant experience (優勢経験)」(p.87 筆者試訳) と呼び、連続体の「peak (ピーク)」として捉えることを主張している。異文化感受性の発達とは、優勢経験の頂点が連続体に沿って移動することによって起きる。この優勢経験は、全ての文化的差異に適用できるものとされており、それゆえに、ある特定の文化に対し「適応」の優勢経験をしながら、他方の文化に「最小化」の優勢経験をすることはない。つまり、異文化感受性のピークレベルの混在はないということである。Bennettによると、文化的と見なすものであれば何にでも、人は同じ知覚ストラテジーを適用するのであり、ある文化について詳しく知っていても、他の文化についてはそうでもなかったり、ある文化を好んでいても他の文化を嫌っていたりすることが人にはあるかもしれないが、「これらの知識や態度における違いが、あらゆる文化の文化的違いを経験する基本的な方法を変えることはない」(Bennett, 2013, p. 87 筆者試訳) という。したがって、たとえば国家レベルでの文化 (国文化) の違いにおいて寛容な人が、他のカテゴリー (e.g., 地域、人種、性別、世代等) での違いに否定的な態度を示す場合、それらのカテゴリーは、その人の中でま

だ文化として認識されていないと考える<sup>5</sup>。

### DMISに関連した諸研究

DMISの各段階を尺度化し、心理テストとして利用可能にすることを目的に開発された異文化感受性発達尺度(Intercultural Development Inventory=IDI; Hammer, 1999; Hammer, Bennett & Wiseman, 2003)は、留学プログラムや教育の効果の測定など様々な分野で活用されている<sup>6</sup>。IDIにおける尺度は、個人が「other culture (他の文化)」や「different culture (異なる文化)」を、どう認識し評価するか尋ねる項目で構成されている。文化の種別は定義されず、何を異文化と想定し回答するかは、個人の解釈に任されている<sup>7</sup>。IDIの開発<sup>8</sup>(Hammer et al., 2003)は、文化的差異の経験を人がどのように語るかインタビューする質的調査に始まり、多段階の統計解析によって、「否定・防衛」13項目、「反転」9項目、「最小化」9項目、「受容・適応」14項目、「閉じ込められた境界性<sup>9</sup>」5項目へと尺度化され、さらにその信頼性と妥当性の検証および確認がなされるに至った。この研究では、「最小化」が、「否定・防衛」と「受容・適応」の間にあることについて、興味深い解釈が加えられている。「最小化」は、文化的枠組みの転換という「受容・適応」の世界観に必要な認識を取り入れるには及ばなくとも、「否定・防衛」で生じた問題を解消することを表すのではないかという解釈である。

IDIにはその後も追試験が繰り返され(Hammer, 2011)、現時点でversion 3である。IDI ver.3で特徴的なのは、中間に「移行期(Transitional Phase)」として「最小化」を据えたことである。Hammerは「最小化」をより肯定的に捉え、自文化中心的ではない状態だが、受容や適応ほど異文化能力や感受性は高くない状態で、DMISの当初の特徴よりも異文化間能力として高い可能性のあることを指摘している。

「最小化」が自文化中心的であるか否かについて、Bennett(2013)は、「『最小化』における経験は理論的に自文化中心的」(p.93 筆者試訳)と主張する。ただし、ある種の移行期とする見方は認めている。「最小化」の位置付けの再解釈に加え、Bennett(2011)は、DMISにおける幾つかの段階のサブカテゴリーの名称やその概念を、整理したり、修正したりもしている。

DMISの段階やそのサブカテゴリーが実際の人びとの経験をどのように説明できるかに関連する研究には、山本(1998)やYamamoto(1994)の研究がある。これらの研究では、日本人大学生の米国留学での渡米前・直後・半年後にインタビュー調査が実施された。DMISを分析単位に、各段階に特徴的な発言や行動を引いてデータを分類したところ、「最小化」と「適応」について、それぞれとの関連性が推論できながらも直接それらのカテゴリーを反映した発言がなかった。日本人大学生の言説に、上位の概念の下で人間を同じものとする観念的な特徴が見られなかった結果を踏まえ、日本人の「最小化」には異なる体現化のある可能性が推論されている。

5 ただし、「倫理的コミットメント」のように、相手の見方を理解し尊重しつつも、自分の信条としては拒否するという立場を取るといった例は別途に考えられる。

6 IDIを実施するにはIDI Qualifying Seminarという研修で資格を取得することが求められており、筆者は1999年に資格を取得した。情報更新のために2004年にも研修に参加した。

7 異文化の存在を見出すか否かも異文化感受性の発達段階(Denial=否定)と関わる。

8 IDI開発の詳細については、Hammer, M. R., Bennett, M. J., and Wiseman, R. (2003)を参照されたい。山本・丹野(2002)にもある程度の詳細が記述されている。

9 BennettによるDMISの1986年、1993年の記述では、「閉じ込められた境界性」は「統合」における1つの状態として議論されている。

山本・丹野(2002)は、IDI(ver.1)の日本語訳を使用し、日本人大学生を対象にした調査を行ったが、下位尺度が一因子を成さず、また信頼性も十分に満たさないという結果であった。山本・丹野(2002)は、翻訳による尺度の等価性の欠如に触れつつも、質問自体が文化的に理解されなかった可能性を指摘している。例えば、「最小化」の「普遍的価値」のサブカテゴリーを測定する4項目のうち3項目では、「私たちの根元は皆、超自然で神聖な存在にあるので、それ故に相違点よりも類似点の方がより多い」のように、「超自然で神聖な存在 (spiritual being)」という言葉が使われる。山本・丹野(2002)は、日本人の文化的違いへのアプローチそのものが異なることを考慮する必要があると述べている。

## 2. 研究の目的

先行研究より、日本人の文化的差異に対する認知は、DMISでの描写とは異なった形で具体化される可能性のあることがわかった。そこで、本研究は、日本的な観点からとらえた文化的差異の主観的経験とはいかなるものであるかを明らかにし、それらをDMISとの関連において記述することを目的とする。そのために、文化間の差異性と類似性の知覚、および、その位置付けや評価に関わる具体的な認知を検証する。その際に、文化のカテゴリーを特定したアプローチを用いたい。理由は、以下の通りである。DMISは、優勢経験が全ての文化的差異に適用されるとしており、ある文化カテゴリーに寛容でも他のカテゴリーに否定的な態度を示す場合は、当事者にとってそのカテゴリーが文化的差異を構成する単位、つまりは異文化として認知されていないと考える。対象となる文化の種別が異なっても、認知の構造は実際に同じであるものか、異文化感受性を日本の文化的文脈から明らかにする一連の研究の流れの中で検証していきたい。したがって、今回の調査では、「国(外国人)」、「地域(よその地域やよその地方の出身の人)」、「専門・組織(働く上での、職業・仕事内容の専門性や、所属する部署・組織が違う人)」と、複数の文化のレベルを表すカテゴリーを特定し、用いている。ただし、紙幅の制限により、本研究では、まず、国レベルを対象とした場合の分析のみを行う。今後、他のカテゴリーについても分析し、その結果およびカテゴリー間の比較について報告していきたい。

## 3. 調査方法

文化的差異を経験する世界観を日本の文脈から明らかにするには、調査に用いる質問紙の項目をDMISやIDIから直接引用することは不適切である。異文化感受性の枠組みが、日本の文脈の中で再構成され、意識や態度として反映されるような項目を用いる必要があった。そこで、予備調査として質的研究を行い、その結果を本調査で用いる質問紙の項目として使用した。

### 3.1 予備調査

社会人の調査協力者18名(男10名、女8名; 20-60代)に対し、60-90分の半構造化面接法によるインタビューを行った。許可を得てICレコーダーに録音された内容を、テープ起こしにより文字化したデータを分析の対象とした。インタビューは筆者と6名の学生<sup>10</sup>により行われた。個人の主観的な異文化体験を尋ねるために、DMIS理論のエッセンスを、「文化間における差異性もしくは同質

<sup>10</sup> 筆者の指導するゼミに所属する大学生で、事前にDMISと半構造化面接法を学び、インタビューの実習による訓練を受けた。

性を、どこにどの程度見出すか、また、認知された情報を自分との関わりにおいてどのように位置づけし、評価するか」に集約し、それを明らかにするためのインタビューガイド(付録1)を設計した<sup>11</sup>。Hammer et al. (2003) の使用したインタビューガイドも参考にした。各設問につき、「外国人の方とでは?」、「よその地域やよその地方の出身の方とでは?」、「働く上での、職業・仕事内容の専門性や、所属する部署・組織が違う人とでは?」と、3通りの文化差の観点について尋ねながら話を聞いた。

データを内包的意味の単位ごとに区切り、546枚のラベルを作成した。まず、言説の内容が前向きで積極的なものを「ポジティブ」、否定的で消極的なものを「ネガティブ」、どちらでもないものを「中立」と3区分に分類した。区分ごとに、筆者と学生2名のグループで、予断や先入観を持たずラベルの声に耳を傾けるKJ法の手順を用いてカテゴリー化することを、上位概念へ収束するまで続けた。これら質的研究に基づき本調査の質問紙が作成された<sup>12</sup>。

## 3.2 本調査

### 調査対象者と調査方法

2013年2月にインターネット調査を実施した<sup>13</sup>。調査対象を20歳以上の青森県、宮城県、東京都、大阪府、福岡県の居住者<sup>14</sup>とし、20,797名にアンケートを配信した。回答のうち、回答所要時間が著しく短いものや自由記述欄で回答と見なされない記述のあるものを除外し、各県200名ずつ計1000名(男508名、女492名; 20代151名、30代245名、40代228名、50代194名、60代182名)の有効回答を得た。

### 質問紙の構成

予備調査での日本の文脈における異文化感受性に関わる語りの中から項目化をし、そのうちの64項目を使用して、「そう思うーそう思わない」の5件法で回答を求めた。このうち37項目については、異文化体験のレベルを、「国(外国人)」、「地域(よその地域やよその地方の出身の人)」、「専門・組織(働く上での、職業・仕事内容の専門性や、所属する部署・組織が違う人)」と個別に想定した回答してもらった。回答画面で、「各設問について、外国人の人たちを相手として想定したとき、あなたの態度や考え方に最も近いものを1つ選択してください<sup>15</sup>」という教示文と共に、問いが画面に表れる。37項目が表示される順序は、ランダム化された。「地域」と「他専門・組織」についても同様の方法で尋ねた。質問紙はこの他に属性を尋ねる質問やその他の質問を含むが、ここでは研究に直接関わる設問の紹介のみに留める。

11 異文化接触の場面であり、かつ、自分に関わりのない人との接触ではなく、関わりのある相手が想定されるように工夫した。

12 紙幅の制限より質的研究の詳細な結果は省略する。結果を直接反映するものとして表1の質問紙の項目の全文を参照されたい。

13 インターネット調査は社会調査を専門とする調査会社を通じて質問を配信した。回答はパソコン経由(スマートフォン等の携帯電話は対象外)のインターネット上で行われた。属性の偏りに関わる懸念につき、今回の調査では国勢調査に基づく性別×年代別の比率に合わせた配信を行った。インターネット調査には妥当性を示す研究(e.g., Gosling, Vazire, Srivastava, & John, 2004)もあり、今回の研究では郵送等其他の手段で得た回答と比較し、結果が著しく影響を受けるような直接的な原因は想定されないと考えた。

14 今後国内の地理的経済的環境と異文化感受性の関係について分析する予定のあるため、このサンプリングを行った。

15 「外国人」とあるのは、国レベルでの文化を対象とした場合の例である。「外国人」の部分が、地域では「よその地域やよその地方の出身の人」、専門・組織では「働く上での、職業・仕事内容の専門性や、所属する部署・組織が違う人」という表記に差し替えられる。



## 4. 分析

文化間の差異性と類似性の知覚、および、その位置付けと評価に関わる、認知の構造を明らかにすることを目的とした分析を行った。64項目のうち37項目については、異文化体験の水準を文化特定の想定した回答を得ていたが、今回の分析では、国レベルの文化でのデータのみを分析の対象としている<sup>16</sup>。

### 4.1 探索的因子分析

64項目について、天井効果、フロア効果のみられる項目のないことを確認し、探索的因子分析 (IBM SPSS Statistics 21を使用) を行った。主因子法による探索的因子分析を行ったところ、スクリープロットと解釈可能性より7因子構造が妥当と考えられた。7因子構造を仮定し、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った結果、.35以上の因子負荷量を示したのは56項目であった。Table 1に結果を示す。

Table 1 探索的因子分析の結果

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7
外国人の人たちと一緒にいる方が気楽でやりやすい	<b>.67</b>	-.01	-.02	-.02	-.19	.10	.13
普段通りに振る舞えば大丈夫	<b>.61</b>	-.03	.08	-.08	.07	.05	-.29
外国人の人たちと、積極的に関わっていききたい	<b>.56</b>	-.20	.21	.01	-.16	.10	.15
違いに直面したとき、わくわくする	<b>.56</b>	-.14	-.07	.19	-.07	.06	.16
通常よりもっと何度も質問し理解しようとする	<b>.53</b>	-.05	.19	.06	-.04	.07	-.07
違いは上辺だけで人間として皆同じはず	<b>.50</b>	.09	.20	-.04	.11	-.06	-.05
知っておく方がよいことはこちらから先に説明する	<b>.49</b>	.25	.03	.08	-.06	-.08	.02
違いでトラブルが生じても時が解決してくれる	<b>.47</b>	.05	-.03	.00	.23	-.18	-.02
自分と相手は同じと考える方がうまくいく	<b>.45</b>	.11	.06	.01	.15	-.12	.02
そもそも自分と相手との違いに気がつかない	<b>.43</b>	<b>.35</b>	-.18	-.09	.07	-.06	.15
異なる見方ややり方を実践できるようになった経験有り	<b>.42</b>	.04	-.02	.25	-.17	.03	.17
違っている部分を出されると好奇心を持つ	<b>.41</b>	-.21	.22	.15	.02	.05	.16
自分と相手との間に違いを見つけることは楽しい	<b>.41</b>	-.19	.12	.26	-.08	.04	.17
国単位で特徴的な行動や考え方があるというのは誤り	<b>.36</b>	.03	.06	-.04	.06	.04	-.04
価値観等の違いに直面しても理解したいと思わない	.15	<b>.74</b>	-.15	-.1	-.05	.01	-.1
価値観等が違う場合、可能ならつきあいたくない	-.16	<b>.72</b>	.15	-.01	-.01	.06	-.11
異なる言動が理解できないとイライラしてしまう	-.11	<b>.69</b>	.09	.12	-.09	.06	-.08
なじみない言葉づかいだと表現が「きつい」と感じる	-.07	<b>.68</b>	.17	.21	-.13	-.11	.00
共通の目的や目標がない場合、相手に関心が持てない	-.01	<b>.66</b>	.10	.10	-.09	.06	-.11
なじみのない言葉づかいの相手だと、引いてしまう	-.29	<b>.60</b>	.30	.06	-.01	-.10	.01
価値観等の違いに直面した時、投げやりになる	.11	<b>.58</b>	-.01	-.17	.01	.05	.11
見方・行動等が違っていても、似た部分だけを見る	<b>.45</b>	<b>.49</b>	.00	-.02	.04	-.12	-.08
異なる人達の中でも、違いに注意・関心を向けられない	<b>.38</b>	<b>.49</b>	-.16	-.14	.03	-.04	.01
やり方に違いを感じてもどうすれば良いかわからない	-.14	<b>.46</b>	.28	-.06	.09	-.04	.23
周囲がほぼ外国人でも、自分のやり方等を変えない	.34	<b>.41</b>	.11	-.07	-.09	.11	-.37
異なる相手とはうやむやのまま折り合いをつける	.16	<b>.40</b>	-.07	-.05	.19	-.09	.14
一人一人違うので集団単位での文化の話には違和感	-.01	.29	-.09	.15	.15	.13	.01
想定外の言動には内心むっとする	-.24	.26	.19	.04	.20	.20	.02

16 紙幅の制限より、本論文内で「国」、「地域」、「専門・組織」の全ての因子分析結果を掲載することができないが、いずれも7因子構造を示し、F1以外の6つが今回の結果と同じ項目によって構成される因子であった。次の研究として報告したい。

## 文化的差異の経験の認知 —異文化感受性発達モデルに基づく日本的観点からの記述—

「自分とは全く違う存在」には否定的な意味を含む	.04	.23	-.01	.09	.19	.19	-.19
価値観等での違いの存在を最初から覚悟しておく	.02	.15	<b>.75</b>	-.05	-.12	.12	-.02
価値観等で違いのある人だからと割り切る	.15	.07	<b>.67</b>	-.12	.11	-.01	.06
違いがあれば、そういうものと自分に言い聞かせる	.08	.09	<b>.61</b>	-.04	.06	.00	.11
違いで衝突した時、やれやれと思いつつも許容する	.11	.09	<b>.48</b>	-.03	.08	-.04	.27
異なる人が大勢の中では居心地の悪さを受け入れる	.18	.01	<b>.47</b>	.05	.02	-.06	.06
初対面の時、見た目や話し方から何か違いを感じる	-.26	.28	<b>.47</b>	.11	-.07	-.04	.10
違いによるトラブルから多くを学ぶことができる	.26	-.08	<b>.46</b>	.16	-.02	.02	.02
実践するまではいかなが違いを認識し尊重する	.33	-.17	<b>.44</b>	.07	.01	.06	-.02
衝突したとしても、違いは失わずに持って欲しい	.32	-.13	<b>.42</b>	.05	.05	.03	-.05
異なる相手には自分から合わせてトラブルを防ぐ	.14	.08	<b>.41</b>	-.05	.19	-.04	.20
ぶつかりあう苦勞を嫌がらずに、発見を重視する	.10	-.14	.07	<b>.59</b>	.03	-.13	-.05
想定外のことをされたりすると興味がわいてくる	.21	-.02	-.10	<b>.56</b>	.01	-.05	-.09
異なる人とやり方の違いをめぐり衝突した経験有り	.01	.24	-.10	<b>.51</b>	-.28	.11	.05
複数の集団間を流動的に往来するのが自分らしさ	.03	.10	-.07	<b>.48</b>	.07	.05	.08
他集団に合わせ日々自分のモードを切り換えている	.08	.05	-.02	<b>.48</b>	-.02	.07	-.03
やり方が違う相手に固定観念を崩された経験有り	-.03	.07	.03	<b>.47</b>	-.07	.07	.13
違いがあるときは、自分の受け入れやすい理由を探す	-.13	-.05	.18	<b>.46</b>	.19	-.04	.04
どんな所が違いどんな共通点があるのかわかりたい	.14	-.06	.20	<b>.42</b>	.01	-.07	-.10
どこにも属さない感覚故に、どこでもやっていける	.16	.04	.04	.27	.12	.26	-.17
異なる人には馴染んで自分達と同じになって欲しい	-.05	.26	.08	.26	.21	-.01	-.09
価値観等で違いに直面しても、適当に受け流す	-.06	-.02	.12	-.07	<b>.63</b>	-.04	.11
違いに直面した時、仕方がないとあきらめる	-.13	-.05	.20	-.10	<b>.59</b>	.07	.14
違いがあるのは当たり前、いちいち考えるのは無駄	-.01	-.15	.13	-.18	<b>.59</b>	.19	-.08
想定外の言動は、深くとらえずやり過ごす	.09	-.02	-.12	.07	<b>.56</b>	.00	-.08
違いに直面した時、嫌な所にはわざわざ触れない	-.14	-.08	.21	-.04	<b>.53</b>	.1	-.05
違いをめぐり衝突するのは時間や労力の無駄な消耗	.02	.08	-.07	-.09	<b>.52</b>	.11	.07
違う所があれば、良い所だけ見て嫌な所は見ない	.02	.01	-.08	.25	<b>.47</b>	-.11	.06
衝突時に「本質的には同じ」と考えるとうまくいく	.14	-.02	-.12	.33	<b>.39</b>	-.12	-.13
出身国が違って髪色や肌色が同じだと安心できる	.03	.05	-.18	.30	.31	.01	.13
違いを乗り越えられない場合、相手の人間性の問題	.10	.14	-.06	.07	.27	.07	-.05
どの集団にも一体化し気楽に無意識ではられない	-.05	.02	.14	.07	.03	<b>.61</b>	-.01
どの集団にも完全に属さないという感覚がある	.08	-.02	.01	-.04	.12	<b>.54</b>	-.06
集団に所属しないため根無し草の不安定さを感じる	.00	.15	-.19	.14	.06	<b>.37</b>	.16
他集団の違いを学ぶと自分らしさが失われる	.06	.22	-.27	.15	.17	.31	.17
違いがうらやましかったり、憧れを感じたりもする	.15	-.01	.25	-.01	-.03	.00	<b>.52</b>
相手の見方ややり方の方が優れていると感じる	.26	.04	.14	.04	.06	.01	<b>.44</b>

## 因子間相関行列

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7
F1	1.00	-.10	.16	.55	.22	.11	.20
F2		1.00	-.23	-.19	.42	.22	.33
F3			1.00	.36	.24	-.01	-.21
F4				1.00	.19	.14	.03
F5					1.00	.11	.20
F6						1.00	.19
F7							1.00

F1には15項目が高い因子負荷量を示した。F1因子の解釈をより明確にすることは異文化感受性の構造を検討する上で役立つという考えに基づき、15項目を用いた主因子法、プロマックス回転に

よる再度の因子分析を行った。その結果、因子負荷量.35以上で、2因子構造（因子間相関係数.52）の解釈ができた。F1-1は違いを識別して認知することより、むしろ違いをぼやかし、「大した違いはないはずだ」と仮定する世界観を表していると解釈した。類似性の強調というよりは、取り立てて違いを意識しない現実知覚によって自他を隔てる境界をぼやかすことに関わるため、「曖昧化」と命名した。F1-2は「曖昧化」とは正反対に、積極的に違いを見つけ、興味を持ち楽しむことに関わるので、「積極性」とした。相反する性質を持つF1-1とF1-2を包括するF1は、違いに敏感になるよりも前向きになることによって、受容する方向へと向かう体験として解釈できる。したがって、F1を「**違いの克服**」と命名した。

F2は「**違いへの不関与**」と命名した。F1と同様の理由により、再度F2の11項目を用いた同様の因子分析を行ったところ、2因子構造（因子負荷量.35以上、因子間相関係数.68）の解釈が可能であった。F2-1は、違いを拒絶して接触を回避することから、「**拒絶**」と命名した。できる限り最初から関与しないでおこうとするのがF2-1であるのに対し、F2-2は、違いに直面した場合に、違いに無関心であることによって距離を置く。視野に入った違いを遠ざけ、最小限の関与に留めることによって不快感を軽減する現実知覚や問題解決に関わるため、「**逃避**」と命名した。

F3は「**違いの容認**」と命名した。前述と同様の理由により、F3に対しても、再度9項目を用いた同様の因子分析を行った。その結果、2因子構造の解釈が可能であった（因子負荷量.35以上、因子間相関は.70）。F3-1は、違いに対し自分なりの心づもりをして、受け入れられる方向へ持っていく自己調整に関わる。積極的な受容ではなくとも、心を広げて自分の許容範囲内に収められるようにする。自然とは受け入れにくいものに対し、折り合いをつけようとする自分の中での譲歩であるため、「**譲歩**」とした。F3-2は、違いを認め尊重することに関わるため、「**尊重**」とした。

F4は、違いを咀嚼し吸収しようとしたり、自己の枠組みを捉え直したり、転換したりする経験に関わる。背後にある違いを学ぶことや衝突を契機に経験をリフレームすること、さらには複数の枠組み間を往来する自己にまでも関わっている因子であるが、違いを取り込み再構成するという共通性のあることから、「**違いの内面化**」と命名した。

F5は、違いとの関わりを保ちつつも、真摯に向き合うことなく、適当に受け流したり、なかったことにしたりして、自分に都合の良いように管理する世界観に関わると解釈できる。衝突を無駄な消耗としたり、あきらめたり、自分から流されたりすることによってやり過ごし、違いの影響力を無効化する。したがって「**違いの無効化**」と命名した。F2「**違いへの不関与**」は違いから逃れようとする経験であるが、F5は、表面上のつきあいを続けながら、違いが自分に対して影響を及ぼすことのないよう対処する点で、F2とは異なる。

F6は、無条件に帰属意識を持てる集団がなく、所属しないという感覚が強いため「**無所属感**」と命名した。F7は違いへの憧れと劣等感が表裏一体となった気持ちを示すため、「**違いへの憧れ**」と命名した。因子名の一覧とその項目はTable 2の通りである。

Table 2 因子名一覧

F1 違いの 克服	F1-1 曖昧化	見方ややり方がお互いに違っていたとしても、自分と相手は同じと考える方がうまくいく 国の単位で見て、その集団に特徴的な行動パターンや、考え方の傾向があるというのは間違いである 基準が異なることが原因でトラブルが生じたとしても、時(時間)が解決してくれる 周りがほとんど外国人でも、そもそも相手のものの見方や行動の仕方の違いに気がつかない 周りがほとんど外国人で、ものの見方や行動の仕方が違っていたとしても、違いには目を向けず似た部分だけを見るようにする 周りがほとんど外国人で、ものの見方や行動の仕方が違っていたとしても、上辺だけの話であり人間として皆同じはずだ
	F1-2 積極性	外国人の人たちと、積極的に関わっていきたい むしろ外国人の人たちと一緒にいる方が、気楽でやりやすい 外国人の人たちと関わるときには、通常の場合よりもっと何度も質問して理解しようとする 見方ややり方が違う人たちに深く関わった結果、その見方ややり方を実践できるようになった経験がある 価値観や行動の基準のことで相手との違いに直面したとき、ワクワクする 自分と相手との間に違いを見つけることは楽しい 周りにいるのがほとんど外国人という状況でも、普段通りに振る舞えば大丈夫 相手が自分と違っている部分を全面的に出してくると、その違いに対し好奇心を持つ
F2 違いへの 不関与	F2-1 拒絶	相手の行動や発言が自分と違って理解できないと、イライラしてしまう なじみのない言葉づかいで接してくる相手だと、引いてしまう 価値観や行動の基準に自分と違うところがある場合、可能であればつきあいたくない 一緒に達成すべき共通の目的や目標がない相手の場合、その人たちに関心が持てない
	F2-2 逃避	価値観や行動の基準のことで相手との違いに直面しても、理解したいとは思わない 価値観や行動の基準のことで相手との違いに直面したら、どうでもいいやと投げやりになる 価値観や背景の異なる相手が大勢いる中にいたとして、その状況に注意や関心を向けなくてもよい 価値観や行動の基準が異なる相手とは、話し合ってもぶつかるよりも、うやむやのまま折り合いをつける方がよい
F3 違いの 容認	F3-1 譲歩	価値観や行動の基準のことで相手との違いに直面したとき、そういうものだと言いに聞かせる 価値観や行動の基準が異なる相手に対しては、自分から相手に合わせることでトラブルを未然に防ごうとする 価値観や行動の基準が異なることが原因で相手とぶつかりあったとき、やれやれと思いつつも許容する 価値観や行動の基準に自分とは違うところがあるだろうと、最初から覚悟しておく 価値観や行動の基準に自分とは違うところのある人だからと、割り切るようにする 価値観や背景の異なる相手が大勢いる中では、多少の居心地の悪さは受け入れる
	F3-2 尊重	取り入れて実践するまではいかないが、相手の見方ややり方がどう違っているのか認識しそれを尊重する 価値観や行動の基準が異なることが原因で生じるトラブルから、多くのことを学ぶことができる 価値観や行動の基準において違いがあることで、これからも互いに衝突するかもしれないが、その違いは失わずに持っていて欲しい

<p>F4 違いの内面化</p>	<p>見方ややり方が違う人に触れると、どんな所が違い、どんな共通点があるのかきちんとわか かりたい 見方ややり方が違う相手に触れて、自分の固定観念が崩された経験をしたことがある 価値観や行動の基準が異なる相手とぶつかりあう苦勞を嫌がらずに、そこから得られる新 しい発見や気づきを重視する これから相手と一緒に何かに取り組まなければならないという前提のとき、想定外のこと を言われたり、されたりすると、興味がわいてくる 価値観や行動の基準に自分と違うところがあったら、どうしてそうなのか自分にとって受 け入れやすい理由を探す 出身の国や地域、あるいは肩書・職業や専門性などが自分とは違う人と、考え方ややり方 の違いをめぐって衝突した経験がある 「〇〇に所属する」・「〇〇の人」・「〇〇出身」・「〇〇人」等の自分がその一員であると強く 感じられる集団を特に持たずに、複数の集団間を流動的に行ったり来たりしているところ に自分らしさや自分のアイデンティティを感じている 他の集団(国、地域、肩書・職業・専門・所属・組織)の人びとに対応するために、日頃か ら、自分の考え方やコミュニケーションの取り方のモード(在り方・仕方)を切り換える経 験をしている</p>
<p>F5 違いの無効化</p>	<p>価値観や行動の基準に自分と違うところがあったら、相手の良い所だけを見て、嫌なとこ ろは見ないようにする 価値観や行動の基準のことで相手との違いに直面したとき、仕方がないとあきらめる 価値観や行動の基準のことで相手との違いに直面しても、適当に受け流す これから相手と一緒に何かに取り組まなければならないという前提のとき、想定外のこと を言われたり、されたりしても、深くとらえずやり過ごす 出身の国や地域、あるいは肩書・職業や専門性などが自分とは違う人と、考え方ややり方 の違いをめぐって衝突することは、時間や労力の無駄な消耗だ</p>
<p>F6 無所属感</p>	<p>「〇〇に所属する」・「〇〇の人」・「〇〇出身」・「〇〇人」等で表せるような集団について、 自分はどこの集団にも完全には所属していないという感覚がある どこの集団にも完全には所属しない感覚があるため、根無し草のような不安定さを感じる どこの集団に身を置いても、完全に一体化して気楽に無意識でいることができず、客観的 な視点で眺めてしまう</p>
<p>F7 違いへの 憧れ</p>	<p>自分との違いを感じるが、それがうらやましかったり、憧れを感じたりもする 相手の人たちのものの見方ややり方の方が優れていると感じることが多い</p>

## 4.2 確認的因子分析

探索的因子分析によって得られた因子間の関係を、二次分析で得られた下位概念までを含め、より詳細に検討するために、「F4～F7」と「F1-1, F1-2, F2-1, F2-2, F3-1, F3-2」を用いた確認的因子分析を行った。上記の10個を構成概念とし、各因子を構成する項目をそれぞれの構成概念への観測変数とし、全ての構成概念間に共分散をかけたモデルを作成し、共分散構造分析(IBM SPSS AMOS 21を使用)による確認的因子分析を行ったところ、データはモデルに対して適合することが示された(GFI=.848, AGFI=.828, RMSEA=.050<sup>17</sup>)。各構成概念間の相関係数(共分散)をTable 3に示す。

17 GFIは変数が少ないほど高い値を出す傾向にあり、観測変数49、潜在変数10の本モデルではRMSEA(0.05以下であればあまりがよく0.1以上で悪いと見なす)を用いる。GFIも適合と判断できる.90に近い値が出ている。また、全ての観測変数から構成変数へのパスは $p < 0.001$ で有意であった。

Table 3 確認的因子分析より相関係数(共分散)

	F1-1 曖昧化	F1-2 積極性	F2-1 拒絶	F2-2 逃避	F3-1 譲歩	F3-2 尊重	F4 内面化	F5 無効化	F6 無所属感	F7 憧れ
F1-1	1.00	.62***	.17***	.42***	.41***	.48***	.45***	.44***	.23***	.63***
F1-2		1.00	-.41***	-.19***	.41***	.75***	.75***	.11**	.19***	.57***
F2-1			1.00	.75***	.13**	-.29***	-.22***	.35***	.28***	.05
F2-2				1.00	-.05	-.39***	-.26***	.41***	.32***	.21***
F3-1					1.00	.75***	.43***	.49***	.15**	.42***
F3-2						1.00	.46***	.20***	.15**	.41***
F4							1.00	.21***	.15**	.35***
F5								1.00	.25***	.36***
F6									1.00	.33***
F7										1.00

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ 

注：因子名は省略して表示

「積極性」と「尊重」、「積極性」と「違いの内面化」、「尊重」と「譲歩」との間には、高い正の相関が認められた。また、「違いの内面化」との関係に対し、「譲歩」、「尊重」、「曖昧化」には、それぞれとの間で中程度の正の相関が見られた。「曖昧化」は他の7つの概念と、「譲歩」は6つの概念との間で、それぞれ中程度以上の相関関係が確認された。

「拒絶」は、「逃避」との間に高い正の相関が、また、「違いの無効化」と「無所属感」との間で弱い正の相関が確認され、同時に、「尊重」および「違いの内面化」との間では弱い負の相関が確認された。「逃避」と「違いの無効化」の間には中程度の相関関係が見られた。「違いの無効化」は、「曖昧化」、「譲歩」とも中程度の相関関係にあった。

## 5. 異文化感受性の発達から見た因子間の関係の構造

ここでは、因子間の関係の構造を異文化感受性の発達から理論的に考察する。まず、「拒絶」と「逃避」と「違いの無効化」は、文化的な違いとの関わりを避けたり、影響を受けないようにしたりするという意味的な解釈から、異文化感受性の発達が未熟な自文化中心の世界観に関わると推論できる。確認的因子分析の結果においても、「拒絶」と「逃避」には高い正の相関が、「逃避」と「違いの無効化」には中程度の相関が認められており、これらを互いに関連する概念として捉えることができる。一方、「拒絶」と「逃避」は、「尊重」および「違いの内面化」と弱い負の相関関係にあり、違いとの関わり方から見ても、これらとは相反する概念と考えられる。異文化感受性の発達度合いが最も低いことを示唆するのは、違いを拒否する「拒絶」とできる。

逆に、異文化感受性の発達度合いが最も高いと思われるのは、違いを咀嚼し、異なる見方から経験を再構築したり、複数の枠組み間を往来したりすることに関わる「違いの内面化」である。「違いの内面化」と、違いを認め尊重する「尊重」は、異文化感受性のより発達した文化相対的な世界観に関わると推論できる。これらの因子と高い正の相関を持つのは「積極性」と「譲歩」、また、中程度の相関を

持つのは「曖昧化」であった。

「積極性」、「譲歩」、「曖昧化」は、単純に文化相対的な世界観との関連のみから解釈することができない。探索的因子分析で得られた「違いの克服」因子を二次分析して抽出されたのが「積極性」と「曖昧化」であった。異文化感受性の発達上、自文化中心的な姿勢を乗り越える意味を持つ因子の可能性はある。しかし一方で、「曖昧化」と「譲歩」は、確認的因子分析において、共に多くの因子と中程度以上の相関関係を持つことも示されていた。たとえば、「曖昧化」は、文化相対的な「違いの内面化」および「尊重」のみならず、自文化中心的な「逃避」と「違いの無効化」とも、同時に中程度の相関関係にあった。

以上の考察を踏まえ、これらの関係をより視覚的に捉えるために、各因子の関係をマッピングし、Figure 2にその構造を示した。確認的因子分析の結果も参考にして、中程度以上の相関関係を基準に、相関関係が強いほど重なりが大きく、弱いほど少なくなるような工夫をした<sup>18</sup>。「無所屬感」は、どの因子とも中程度以上の相関が無く<sup>19</sup>、また「違いへの憧れ」は2項目しか該当しない因子であったため、ここでは解釈せず、Figure 2にも入れなかった。

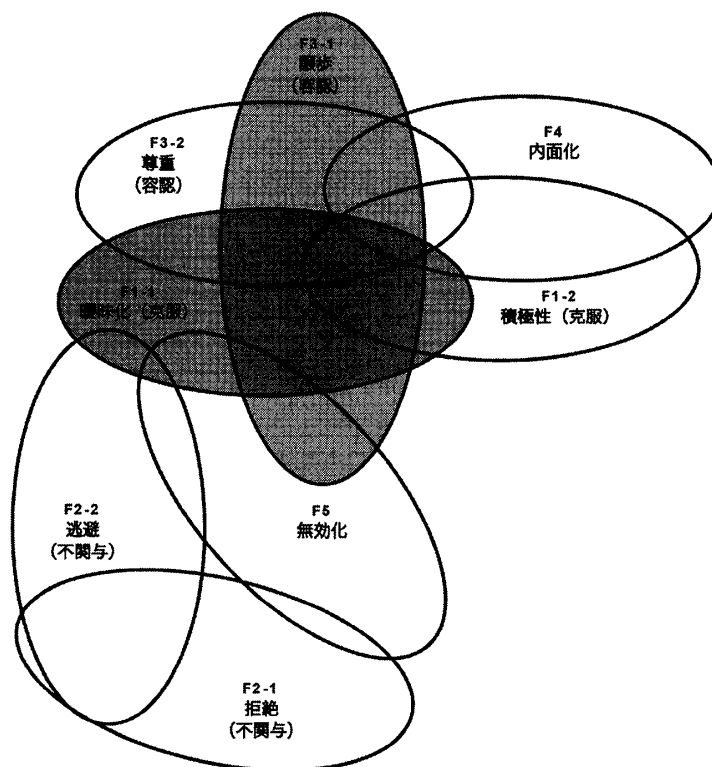


Figure 2 異文化感受性の発達から見た因子間の関係の構造

18 「曖昧化」と「譲歩」については、関係のある因子が多いため、必ずしもこの通りに重なりを調整できていない。図式化することでマッピングイメージが持てるようにすることが目的であるため、正確な因子間の相関関係の値については表3を参照されたい。

19 Hammer (2011)は、DMISの「閉じ込められた境界性」と他の尺度との相関関係が、異文化感受性の発達を理論的に支持するものではなかったという結果を踏まえ、「閉じ込められた境界性」とは「統合」の低位概念でなく、またDMISの連続体の中にも位置づけられない概念であると解釈し直した。その結果、「文化的遊離 (Cultural Disengagement 筆者試訳)」という名称に変更した。本研究における「無所屬感」はこの概念に近いものと考えられる。

Figure 2では、最下部に最も自文化中心的と仮定した「拒絶」を配置した場合、最上部には文化相対的と仮定した「違いの内面化」や「尊重」が配置される。その中間で、上下の領域にまたがる「曖昧化」は、自文化中心的世界観と文化相対的世界観をつなぐ性質を持つと考えられる。しかし、概念的な意味としては、自分との境界をぼやかして同化させるものであることから、その足場は、文化相対的ではなく自文化中心的世界観にあると考えることが適切であろう。

また、中央で、縦に長く伸びる「譲歩」にも、同様の橋渡しの性質が推論できる。「譲歩」は、「やれやれと思いながらも許容する」や「多少の居心地の悪さは受け入れる」や「そういうものだと自分に言い聞かせる」といった内容から、自ら積極的に違いを求めることはしないが、文化相対的であろうとする世界観を持つものと解釈される。

## 6. DMISにおける各段階との関係

本研究で抽出された異文化感受性にまつわる概念と、DMISとの関連性を以下に検討する。ここでは区別のため、DMISにおける発達段階の名称は英語名で示す。

「違いへの不関与」の「拒絶」と「逃避」は、文化的違いを知覚することによって生じる不快感を退け、自己の世界観を守る。世界観が脅かされたが故の防衛的な異文化体験という点では、DMISの「Defense (防衛)」に該当する。しかし、「Defense」を端的に表すと、相手を貶め、優越感を持つスタイルで描写されるのに対し、「拒絶」と「逃避」を端的に表すと、違いが目についても遠ざけて見ないように距離を置くスタイルで描写できる。違いが見えない状態なら「Denial (否定)」に近いが、「拒絶」からは違いを嫌がる様子が、「逃避」からは違いを面倒なものとする様子が窺え、これら否定的な側面は「Defense」の世界観の体現ではないかと考えられる。DMISでは、「Defense」は違いに対し攻撃的、「Denial」でも自分たちに直接影響が及ぶとなると攻撃的になるとされているが、日本ではできるだけ「不関与」でいることが好まれる可能性が指摘できる。ところで、DMISは、発達段階が線的に一方向に進むことや、個人の異文化感受性がどれか1つの段階にあてはまることを仮定していない(Bennett, 2013)。優勢経験としていずれかの段階をピークに、その前後の段階にも分布した状態のあることが想定されている。したがって、「Defense」のように対立したり攻撃的になったりせず、不関与になることで、「Denial」へ出戻りし、違いに無感覚でいられる猶予期間を引き延ばそうとするモラトリアム的なDenialが、防衛的な世界観として具現化されているのではないかと推察できる。

「違いの無効化」は、違いを自分にとって都合の悪いもの、つまり否定的なものとする点で、「Defense」に関わる。しかし、「拒絶」や「逃避」と同様に、対立や攻撃をしないタイプの「Defense」で、むしろ正面衝突を避けるために身をかかわす。「違いの無効化」には異文化と交流する前提があり、関わりの中にながらにして、違いの影響を巧みに削いで、自己の世界観を防衛する。違いに対する防衛的な世界観が、その場をしのぎ、違いに対し無感覚でいる避難方法として、体現されているとも解釈できる。

「曖昧化」は、「Minimization (最小化)」に関わる。しかし、「Minimization」が「類似性や普遍性の強調」という世界観であるのに対し、「曖昧化」は「違いを意識しないようにする」ことに重きがあることができる。違いを軽視する点では概念的に同じであるが、違いを上位の普遍的概念に吸収させることで相手を同類化させるのではなく、相手との境界線を曖昧にして、違いに対し構えないようにする世界観を表している。「曖昧化」は「Minimization」と同様に自文化中心的世界観ではあるが、ここでの「同



じと思ってよいはずだ」という仮定には、相手をいったん自分と同じカテゴリーに入れて、自分と同等の存在として認められるようになることよりも、違いへの恐怖心を和らげ心の壁を下げることに、その目的が窺える。

「曖昧化」および「譲歩」は、自文化中心的な「Denial」、「Defense」、「Minimization」と、文化相対的な「Acceptance (受容)」との間をつなぐ過程として捉えることができる。「積極性」も一部この役割を果たす。違いから逃げたり、やり過ぎしたりするのではなく、積極的に壁を乗り越えるための「曖昧化」であり、また、違いと向き合い受け入れられるよう自分の中で問題解決するための「譲歩」と解釈できる。これら2つの概念は、自文化中心的な段階と文化相対的な段階、双方との正の相関が確認されることから、両者の間をつなぐ「中継段階」として位置付けられるであろう。

「積極性」は違いと交流する前向きな姿勢を示すが、因子分析の段階で「曖昧化」と合わせて1つの因子を構成していたことから、「積極性」自体が文化相対的な世界観を示すとは判断できない。その一方で、「尊重」や「違いの内面化」とも正の相関が見られるので、「積極性」には文化相対的な段階への移行を後押しする役割が推測される。

「尊重」は「Acceptance」に該当すると解釈できる。また、「違いの内面化」は「Acceptance」と「Adaptation (適応)」に関わる概念と位置付けられる。「譲歩」が自己調整による自己完結的な受容であったのに対し、ここでは衝突から相手の視点を取り込む受容へと発展し、自分の見方、やり方やあり方を、捉え直す経験に及んでいる。

以上、異文化感受性項目を用いて因子分析を行い、そこで得られた因子間の関係および構造を検討した後に、DMISの各段階との関連を考察した。「拒絶」、「逃避」、「違いの無効化」といった自文化中心的な概念は、DMISの「Denial」を延長させ、対立を避けるような世界観であることが確認された。また、自文化中心的段階と文化相対的段階のギャップを埋める「曖昧化」および「譲歩」は、違いへの不安を軽減し受け入れるための「中継段階」である可能性が指摘された。

## 7. まとめ

本研究では、日本において文化的差異の経験がどのように認知されているかを明らかにし、それらをDMISにおける世界観の体現と関連させながら記述した。今回は特に国レベルの文化に特定した認知を取り上げた。文化差を認知した時の防御的な反応には、DMISの「防衛 (Defense)」のような対立的認知の代わりに、「否定 (Denial)」状態を維持しようとする認知のあることが示された。また、相手との交流を保ちつつも、違いを受け入れずに対処する「違いの無効化」のように、対立を避ける処世術のような認知のあることも明らかになった。そして、このような自文化中心的な認知と、文化相対的な認知との間には、葛藤しながらも違いへの不安や抵抗感を和らげ、前向きに捉えようとする「中継段階」の認知のある可能性がわかった。「曖昧化」は違いに対する構えを解き、「譲歩」は自分の受け止め方を調整することで、共に抵抗感を緩和し、違いを受容する世界観を表す。やや自己完結的な受容ではあるが、その状態を足がかりとして、「自分なりの理解による受容」から、「相手にとって意味ある秩序を理解した受容」へと、移行すると考えることができる。

ここから推論できる日本人の異文化感受性の発達の具体化には、一例として以下のようなパターンを考えることが可能ではないか。つまり、違いのあることがわかっても、できる限り触れないで済むようにし、接触が避けられない場合には、適当な方便を用いてやり過ごす。その中で、葛藤しな

がらも、徐々に構えを解き、自分の受け止め方を工夫するようになると、許容できる範囲が増え、自分なりの理解に基づいた受容ができるようになる。そのうちに、衝突の中でも相手から学んだり、自己の枠組みを再検討したりできるようになると、相手にとって意味ある秩序を見出そうとする受容へと変化する、というパターンである。

上記は、国のレベルでの文化的差異を対象とした場合のパターンの記述である。今後の課題として、「地域」および「専門・組織」での分析結果との比較を行い、カテゴリーの異なる文化的違いに対する異文化感受性に、いかなる共通点や相違点があるか明らかにする必要がある。なお、「普段の生活で外国人と触れ合う機会がある」という設問に「あてはまる」、「ややあてはまる」と答えたのは1000名中の183名で、また「触れ合うまではいかないが目にする機会がある」では343名であった。イメージや想像で回答した者も多いということになる。DMISやIDIでは、異文化の種別が特定されない他に、異文化との接触経験の有無も問われない。そこにはステレオタイプだけで認知する異文化感受性も含まれる。外国人と日常的に触れ合う経験を持たない回答者が多いとしても、サンプリングの偏りが結果の解釈を歪めると考えるより、そのような現状が日本の文化的文脈にあると考え、今回の結果はその文脈における異文化感受性を示すものとするのが本研究の目的に適う。今後の分析の中で、外国人との日常的な接触経験の有無による群間で、回答の傾向にどのような違いがあるか検証してみたい。

この他の課題として、DMISの「防衛」のように、違いを自分との対立軸で捉え、否定的に評価する世界観が確認されなかったことが挙げられる。現実には外国人に対する差別意識やヘイトスピーチなど、日本において「防衛」の「侮蔑」や「優越」を顕著に示した現象のあることは確かである。インタビューでは強い否定の表現がほとんど出ず、また、調査項目に入れた「想定外のことを言われたり、されたりすると内心むっとする」や「違いには否定的な意味合いが含まれる」は、探索的因子分析で因子を形成するに至らなかった。今後は、強い侮蔑表現の項目を理論的に作成し、検討することも必要である。また、対立的でないのは外国人との実体験が少なく脅威を感じないためなのか、実体験が多いと実際には対立的見方が増えるのか、今後の分析の中で、外国人との日常的な接触経験の有無から検証する必要がある。

今後はさらに、地理的環境や経済的背景など、今回の分析とは異なる側面からの分析も進めたい。日本における異文化感受性を明らかにするための調査を継続し、個人の異文化体験を説明する理論の構築に貢献したい。

## 引用文献

- Bennett, M. J. (1986). A developmental approach to training for intercultural sensitivity. *International Journal of Intercultural Relations* **10**: 170-198.
- Bennett, M. J. (1993). Towards ethnorelativism: A developmental model of intercultural sensitivity. In R. M. Paige (Ed.), *Education for the intercultural experience*. Yarmouth, ME: Intercultural Press. pp. 21-71.
- Bennett, M. J. (2011). A developmental model of intercultural sensitivity. The Intercultural Development Research Institute. <[http://www.idrinstitute.org/allegati/IDRI\\_t\\_Pubblicazioni/47/FILE\\_Documento\\_Bennett\\_DMIS\\_12pp\\_quotes\\_rev\\_2011.pdf](http://www.idrinstitute.org/allegati/IDRI_t_Pubblicazioni/47/FILE_Documento_Bennett_DMIS_12pp_quotes_rev_2011.pdf)> (August 1, 2013).
- Bennett, M. J. (2013). Intercultural Adaptation. In M. J. Bennett (Ed.), *Basic concepts of intercultural communication: Paradigms, principles, & practices*. Boston, MA: Intercultural Press. pp. 83-103.
- Gosling, S. D., Vazire, S., Srivastava, S., and John, O. P. (2004). Should we trust Web-based studies? A comparative analysis of six preconceptions about Internet questionnaires. *American Psychologist*, **59**, 93-104.
- Hammer, M. R. (1999). A measure of intercultural sensitivity: The Intercultural Development Inventory. In S. M. Fowler & M. G. Fowler (Eds.), *The intercultural sourcebook*. **2**. Yarmouth, ME: Intercultural Press. pp.61-72.
- Hammer, M. R. (2011). Additional cross-cultural validity testing of the Intercultural Development Inventory. *International Journal of Intercultural Relations*, **35**, 474-487.
- Hammer, M. R., Bennett, M. J., & Wiseman, R. (2003). Measuring intercultural sensitivity: The Intercultural Development Inventory. *International Journal of Intercultural Relations*, **27**, 421-443.
- Kelly, G. (1963). *A theory of personality: The psychology of personal constructs*. New York: Norton.
- Matsumoto, D. (2000). *Culture and psychology: people around the world* (2nd ed.). Belmont, CA: Wadsworth.
- 小塩真司 (2004). SPSSとAmosによる心理・調査データ解析——因子分析・共分散構造分析まで—— 東京図書
- Perry, W. G. (1970). *Forms of intellectual and ethical development in the college years*. New York: Holt, Rinehart, & Winston.
- Yamamoto, S. (1994). *A qualitative study of Japanese students' intercultural experiences in the U.S. in relation to the developmental model of intercultural sensitivity*. Unpublished master's thesis, Portland State University, Portland, Oregon.
- 山本志都 (1998). 異文化センシティブィティ・モデルを日本人に適用するにあたって——再定義の必要性について—— 異文化コミュニケーション, **2**, 77-100.
- 山本志都 (2011). 異文化間協働におけるコミュニケーション——相互作用の学習体験化および組織と個人の影響の実証的研究—— ナカニシヤ出版
- 山本志都・丹野 大 (2002). 「異文化感受性発達尺度 (The Intercultural Development Inventory)」の日本人に対する適用性の検討——日本語版作成を視野に入れて—— 青森公立大学紀要, **7**, 24-42.

## 付 録

## 付録1 インタビューガイド

- 1) 自分の身の回りで、自分と相手との間に違いを感じることはありますか？
- 2) 自分と相手の違いが原因で、何らかのトラブルややりにくさが生じることは考えられますか？  
そのようなことが生じるのを、どう思いますか？ 自分にとってでも、何かやる上ででも、どちらでも構いません。
- 3) 自分と関わる機会のある人に対し、色々ありながらも最終的には、自分と「本質的には同じだな」と考えるか、「やはり違うんだな」と考えるか、どちらの方がうまくいきますか？ ケースバイケースかと思いますが、基本的にはどちらのアプローチがよいと思われますか？
- 4) 自分と関わる機会が多い人に対し、「自分たちと同じような感じになってくれる」のと、「自分たちと違う部分を失わずにいてくれる」のでは、極端な話、相手にどちらを期待しますか？

- 5) 自分に関係ある人と接していて、自分にはよくわからない発言や行動を相手がした時、自分とは違うところがあると感じたら、どう対処しますか？
- 6) 自分と違う相手に深く関わった結果、相手のやり方やものの見方を取り入れて、自分でも実践できるようになったという経験はありますか？
- 7) 他の集団（他の国、地域、職業・専門・所属・組織など）が持つ独自の秩序・世界観・ルールを学び、そこから、新たなアイデンティティ（自分らしさ、よりどころ）を身に付けた経験がありますか？
- 8) そうやって身に付けた複数のアイデンティティの間を往き来しているのが自分らしいと感じますか？

設問は、1つずつA4サイズの紙に、大きな文字で、重要なキーワードを赤字で書き出し、その話題をしている間中インタビュー参加者の目に入るようにしていた。話題の入り口としてクローズドクエスチョンで提示しているが、その後の話の展開にはオープンクエスチョンを用いている。